

ウィトゲンシュタインにおける宗教と生活

—トルストイとの関係を手がかりに—

伊 藤 潔 志

はじめに

I 生命の宗教

(1) トルストイの聖書観

(2) トルストイの宗教観

II 生活の宗教

(1) トルストイとの邂逅

(2) 教義と教会への疑念

(3) 生活の在り方の転換

おわりに

はじめに

前稿では、ウィトゲンシュタイン (Ludwig Josef Johann Wittgenstein, 1889-1951)¹⁾ が一貫して宗教に関心を持ち続けていたことを踏まえ、主に前

キーワード：トルストイ，精神（霊），生活（生命），福音書，信仰

1) 本稿でウィトゲンシュタインのテキストは、下記のものを使用した。引用にあたっては、略号の後に頁数（DT については原文の頁番号）をそれぞれ示した。

TB: *Tagebücher 1914-1916*, in: *Ludwig Wittgenstein Werkausgabe*, Band 7

期哲学から読み取れる宗教的な意味を探った²⁾。そして、ウイトゲンシュタインの哲学は宗教思想そのものであるが、ウイトゲンシュタインはそれを語っていない、と結論づけた。すなわち、ウイトゲンシュタインは宗教について語ることをあえて自制しているかのように思えるのだが、それが『論理哲学論考 (*Logisch-Philosophische Abhandlung*)』(1921年。以下では『論考』と略記する)の第7命題に現れているのだ、と。それを裏づけるのは、手稿などから看取されるウイトゲンシュタインの宗教に対する大きな関心である。

それを踏まえ本稿では、ウイトゲンシュタインの宗教観を明らかにするため、ウイトゲンシュタインの遺稿を中心に検討していきたい。もっとも、正確にはウイトゲンシュタインの著作と呼べるものは『論考』くらいであり、それ以外には小学校教員時代に書かれた『小学校のための辞書 (*Wörterbuch für Volksschulen*)』(1926年)があるだけである。一般に後期ウイトゲンシュタインの「主著」とされる『哲学探究 (*Philosophische Untersuchungen*)』(1953年。以下では『探究』と略記する)も、遺稿に属するものであって、著作で

-
- ↘ I, Surkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1984. (『草稿』)
 GT: *Geheime Tagebücher 1914-1916*, Wilhelm Baum, hrsg., Taria und Kant, Wien, 1991. (『秘密の日記』)
 VB: *Vermischte Bemerkungen*, in: *Ludwig Wittgenstein Werkausgabe*, Band VIII, Surkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1984. (『雑考』)
 DT: *Denkbewegungen: Tagebücher 1930-1932, 1936-1937*, Ilse Somavilla, hrsg., Haymon Verlag, 1997. (『哲学宗教日記』)

なお、訳出にあたっては、次の訳書を参照した。

奥雅博訳『ウイトゲンシュタイン全集』第1巻, 大修館書店, 1975年。

丘沢静也訳『反哲学的断章 文化と価値』青土社, 1999年。

イルゼ・ゾマヴィラ編 (鬼界彰夫訳)『ウイトゲンシュタイン 哲学宗教日記』講談社, 2005年。

- 2) 拙稿「ウイトゲンシュタインにおける限界の彼岸」(桃山学院大学キリスト教学会『桃山学院大学キリスト教論集』第50号, 2015年3月, 85~112頁所収)を参照のこと。

ウイトゲンシュタインにおける宗教と生活

はない。実際のところ、ウイトゲンシュタインの「著作」のほとんどは、遺稿である。したがって、本稿が注目するウイトゲンシュタインの遺稿とは、最終稿に近い「著作」ではなく、準備稿に近い草稿や日記、手紙の類を指す。

ただし、日記や草稿などの記述にどれほど重きを置くことができるのかについては、慎重に判断する必要があるだろう。「著作」がウイトゲンシュタインの哲学の結果であるのに対して、日記や草稿などはその過程である。それゆえ、それらを「ウイトゲンシュタインの思想」と呼んでよいのか、という問題はある。ただし本稿は、ウイトゲンシュタインの哲学の結果を問題にするのではなく、語られていないウイトゲンシュタインの哲学の背後にあるものを問題にする。そして、ウイトゲンシュタインの哲学の真の主題が宗教の問題であることを主張し、その実相を明らかにしようとするものである。したがって、日記や草稿などに目を向けること自体は、間違いではないだろう。

ウイトゲンシュタインの遺稿は、二万頁という膨大な量にのぼる。それらは手稿や手紙などからなり、そこにはウイトゲンシュタインの様々な思考の段階が認められる。そうすると、ウイトゲンシュタインの遺稿がいかなるものなのかが問題になる³⁾。たとえば『探究』は、完成稿に近い段階であったと評価されている。ウイトゲンシュタインの思想に注目するのであれば、こうした完成度の高い「著作」を重視することになるだろう。しかし本稿のように、ウイトゲンシュタインの思考の過程、あるいは私的な関心を探ろうとするのであれば、日記の類にも注意を払わねばならない。それゆえ本稿では、日記や草稿が最終稿でないことを踏まえつつ、それらをウイトゲンシュタインの哲学活動の一部として取り扱っていくのである。

ところで、ウイトゲンシュタインの日記や手稿、すなわち『草稿1914～1916年 (Tagebücher 1914-1916)』(1961年。以下では『草稿』と略記する)、『秘密の日記1914～1916年 (Geheime Tagebücher 1914-1916)』(1985年。以

3) 遺稿研究の状況については、奥雅博「遺稿研究の現状」(飯田隆編『ウイトゲンシュタイン読本』法政大学出版局、1995年、3～15頁所収)を参照のこと。

下では『秘密の日記』と略記する),『雑考 (*Vermischte Bemerkungen*)』(1977年),『思考運動——日記1930~1932年, 1936~1937年—— (*Denkbewegungen: Tagebücher 1930-1932, 1936-1937*)』(1997年。以下では『哲学宗教日記』と記載する)といった遺稿を狩猟していると, ウイトゲンシュタインが宗教についてたびたび言及していることに気づく。それらのいくつかは前稿でも紹介したが⁴⁾, そこからはウイトゲンシュタインの宗教に対する関心が大きいこと, そしてそれが前期から後期に至るまで一貫していることが分かる。このことは, ウイトゲンシュタインの伝記にも裏づけられる。しかし, それらはいくつまで断片的な書きつけであって, そこからウイトゲンシュタインが宗教に対して強い関心を持っていたことは窺われても, ウイトゲンシュタインの宗教観が明瞭に示されるわけではない。

そこで本稿では, ウイトゲンシュタインの宗教観の特質を明らかにするため, ウイトゲンシュタインとトルストイ (Lev Nikolayevich Tolstoy, 1828-1910) との関係に注目したい。後述のように, トルストイはウイトゲンシュタインに大きな影響を与えた思想家だが, ウイトゲンシュタインの宗教に関する言説を両者の関係を軸に検討することで, ウイトゲンシュタインの宗教観に一定の輪郭を与えることができるだろう。

I 生命の宗教

これまで, ウイトゲンシュタインとトルストイとの関係については, その重要性が指摘されながらも, 主題的に論じられることは少なかった。本節では, ウイトゲンシュタインとトルストイとの影響関係を具体的に明らかにするため, トルストイの宗教思想を概観しておきたい。先述のように, ウイトゲンシュタインの遺稿からは, 断片的な情報しか収集できない。ここでトルストイの宗教観を見ておくことは, ウイトゲンシュタインにトルストイがどのような

4) 拙稿, 前掲論文, 87頁を参照のこと。

ウイトゲンシュタインにおける宗教と生活

影響を与えていたのかを具体的に明らかにする準備になる。

(1) トルストイの聖書観

元来トルストイは、自ら言うように「一切の信仰を失ったという意味でのニヒリスト」であった⁵⁾。それが、『懺悔 (*A Confession*)』(1882年)によると、50歳になったトルストイは、「人生とは無意味である」という「真理」に苦しみ、自殺の危機に悩まされ、「生の停止」と呼ばれる危機を体験する⁶⁾。その後トルストイは、「人生の意義」を求め、紆余曲折を経て、信仰に至る⁷⁾。しかし、ロシア正教会の教義に矛盾や曖昧さを発見すると⁸⁾、教会との交流を断ち⁹⁾、聖書研究に取り組んだ¹⁰⁾。こうした信仰に至るまでの道程について、トルストイは、『わが信仰はいずれにありや (*What I Believe*)』(1884年)の中で、次のように言っている。

教会が私に与えてくれた法則は、私にとって大切なキリスト教的気分にするこしも私を近づけないどころか、むしろそれから遠ざけるようなものだった。だから教会にはついていかなかった。私にとって必要かつ貴重

5) トルストイ (中村融訳) 『わが信仰はいずれにありや』 (中村融訳『トルストイ全集』15, 河出書房新社, 1974年, 5~153頁所収) 6頁を参照のこと。

6) トルストイ (中村融訳) 『懺悔』 (中村白葉, 中村融共訳『トルストイ全集』14, 河出書房新社, 1973年, 345~400頁所収) 355~356頁を参照のこと。なお『懺悔』は、実録というよりも告白文学に属する作品であり、そこで書かれていることがトルストイの実生活に発していることはたしかだが、すべてが事実というわけではない。ただし、「生の危機」に関する記述については、かなりの程度までトルストイの実体験と重なっていると言われている。詳しくは、藤沼貴『トルストイ』第三文明社, 2009年, 380~384頁を参照のこと。

7) トルストイ, 前掲書, 388頁を参照のこと。

8) トルストイ, 前掲書, 392頁を参照のこと。

9) トルストイ, 前掲書, 394頁を参照のこと。

10) トルストイ, 前掲書, 397頁を参照のこと。

だったのは、キリスト教の真理に基づいた生活だったのに、教会が私に与えてくれたのは、私にとって貴重な真理とはまったく無縁な生活の規則だった。教義の信仰・聖礼・斎戒・祈禱などの遵守などについて教会から与えられる規則など私には不必要であり、しかもキリスト教の真理に基づいた法則などというものはなかったのである¹¹⁾。

トルストイの教会批判は、教会の教義や規則に対する疑問に端を発している。さらに、教会による他宗派への批判や戦争・死刑の是認が、それに拍車をかけた¹²⁾。教会に対する疑念に苦しんだトルストイは、聖書研究を開始する。そして教会の矛盾は、『旧約聖書』と『新約聖書』との間にある齟齬から目を背けていること、すなわちイエスが『新約聖書』の中で『旧約聖書』を修正しているという事実を看過していることに由来する、と考えた。たとえ

11) トルストイ (中村融訳) 『わが信仰はいずれにありや』 (中村融訳『トルストイ全集』15, 河出書房新社, 1974年, 5~153頁所収) 9頁。なお、『要約福音書』の緒言では、次のように言っている。「予がキリスト教に導かれたのは、神学的研究でも歴史的研究でもなく、五十歳のとき、われとは何ぞ、わが生の意義は那邊にありやということについてみずからたずね、また周囲のあらゆる賢人たちにたずねて、汝は原子の偶然な結合であるという答えをえた事実によってである。人生に意義はない、人生そのものが悪である——こうした答えをえたことによって、予は絶望におちいり、みずからを殺さんとまでしたのであったが、その時、むかし自分が信仰を持っていた子供の時分には、人生が自分にとって意義のあったこと、および、予の周囲の信仰を持っている人々、——大部分富貴によって墮落させられていない人々、——は信仰を失わず、人生の意義を獲得していることを思い出して、予は、予にあたえられた周囲の賢人たちの解答の真実性に、疑念をいだくにいたったのである。そして、キリスト教が人生の意義を理解する人々に与えている解答を、あらためてしらべてみる気持になったのである」(トルストイ〔中村白葉訳〕『要約福音書』〔中村白葉, 中村融共訳『トルストイ全集』14, 河出書房新社, 1973年, 251~344頁所収〕256頁)。

12) トルストイ (中村融訳) 『懺悔』 (中村白葉, 中村融共訳『トルストイ全集』14, 河出書房新社, 1973年, 345~400頁所収) 394~397頁を参照のこと。

ウイトゲンシュタインにおける宗教と生活

ば、「モーセの十戒」には「殺してはならない」、「姦淫してはならない」とあるが¹³⁾、『旧約聖書』には「男が人妻と寝ているところを見つけられたならば、女と寝た男もその女も共に殺して、イスラエルの中から悪を取り除かねばならない」¹⁴⁾といった、十戒に反した記述が散見される。トルストイは、こうした『旧約聖書』の矛盾は『新約聖書』の中でイエスによって修正されている、と考えた。たとえば、イエスの「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」¹⁵⁾といった言葉が、それに該当する。このように解釈することで、トルストイは『旧約聖書』と『新約聖書』との間の矛盾を解消しようとしたのである。

そしてトルストイは、「人生の意義とは何か」という問いに対する答えは「イエスの教え」のみにあると考え、『新約聖書』のマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによる四つの福音書に注目する。すなわち「福音書に、すべてのいける人々の生活を指導する意義の説明を発見した」¹⁶⁾のである。そして、徹底した福音書研究の末、1881年に四福音書を改作した『四福音書の総括と翻訳 (*The Four Gospels Harmonized and Translated*)』(1901年)を書き上げた。この『四福音書の総括と翻訳』を約5分の1に縮約して出版したものが、『要約福音書 (*The Gospel in Brief*)』(1881年)である¹⁷⁾。

『要約福音書』においてトルストイは、「キリスト教の源泉は、福音書であった」¹⁸⁾と述べた上で、福音書の中に「泥土の不法」¹⁹⁾とでも呼ぶべき「教会の

13) 「出エジプト記」第20章第3～17節を参照のこと。なお、本稿で聖書からの引用は、共同訳聖書実行委員会約『聖書 新共同訳』日本聖書協会、1996年に拠った。

14) 「申命記」第22章第22節。

15) 「マタイによる福音書」第5章第39節。

16) トルストイ (中村白葉訳) 『要約福音書』 (中村白葉, 中村融共訳『トルストイ全集』14, 河出書房新社, 1973年, 251～344頁所収) 256頁。

17) 要約された経緯については、藤沼貴, 前掲書, 425頁を参照のこと。

18) トルストイ, 前掲書, 256頁。

19) トルストイ, 前掲書, 256頁。

醜悪な教義」²⁰⁾ が混ざっていることを指摘する。そこでトルストイは、四福音書から「彼〔イエス〕の教えそのもの」²¹⁾ を取り出すため、「キリスト教の名を僭した例の醜悪な伝説」²²⁾ を取り除こうとした。「泥土の不法」とは、キリスト教の教義に見られる「矛盾」²³⁾ と「不合理」²⁴⁾ である。ここで言われている「矛盾」とは、先に見たような『旧約聖書』と『新約聖書』とを強引に調和させようとすることで発生する矛盾である。また「不合理」とは、イエス誕生の経緯、イエスが起こした数々の奇蹟、イエスの復活のような超自然的な出来事に関する記述を指す。いわば、キリスト教の教義の大半である。要するにトルストイは、キリスト教の教義にはイエス自身が教えたものとイエスの解釈者たちがイエスに押しつけたものからなっており²⁵⁾、イエスが語っていない「虚偽の解釈」²⁶⁾ をキリスト教の教義から排除し、「イエスの教えそのもの」を抽出しなければならない、と言うのである。「泥土の不法」は、「イエスの教えそのもの」についての解釈を煩雑にし、またイエスの神性を信じない者の不信を助長するからである²⁷⁾。

(2) トルストイの宗教観

それでは、「イエスの教えそのもの」とは何か。ギルフォード (Henry Gifford, 1913-2003) によれば、「トルストイの靈感は、どんな場合にも『山上の垂訓』を拠りどころにしている」²⁸⁾。「山上の垂訓」とは、腹を立ててはなら

20) トルストイ, 前掲書, 256頁。

21) トルストイ, 前掲書, 261頁。

22) トルストイ, 前掲書, 261頁。

23) トルストイ, 前掲書, 257頁。

24) トルストイ, 前掲書, 261頁。

25) トルストイ, 前掲書, 260頁を参照のこと。

26) トルストイ, 前掲書, 257頁。

27) トルストイ, 前掲書, 254頁を参照のこと。

28) Henry Gifford, *Tolstoy*, Oxford University Press, English, 1982, p. 46.

ウイトゲンシュタインにおける宗教と生活

ない、姦淫してはならない、誓ってはならない、復讐してはならない、敵を愛しなさいといった、イエスの教えである²⁹⁾。トルストイは、これを「イエスの教えそのもの」だと考えたのである。トルストイは、次のように言っている。

「悪もしくは悪しき者に逆らうな」というこの言葉こそ、私にとっては一切を啓示してくれた真の鍵であった³⁰⁾。

それでは、トルストイの宗教観を『要約福音書』を中心に明らかにしていこう。先に述べたように、『要約福音書』は『四福音書の総括と翻訳』の抄本であるが、『四福音書の総括と翻訳』は福音書の単なる総括・翻訳ではなく、トルストイ独自の福音書解釈が込められている。それゆえ『要約福音書』にも、トルストイの解釈が色濃く反映されている。『要約福音書』は緒言と本論12章とからなるが、トルストイによると各章はそれぞれ次のような意味を持っている。

- 一、人は無限なる本源の子である、肉によらず霊によるこの父の子である。
- 二、ゆえに人は、霊をもってこの本源につかえなければならない。
- 三、万人の生命は聖なる本源を持っている。そしてその本源だけが神聖である。
- 四、ゆえに人は、万人の生命中に存するこの本源につかえなければならない。これは父の意志である。
- 五、生命の父の意志にたいする奉仕は、生命を与える。
- 六、ゆえに自分一個の意志の満足は、生命にとって不必要である。
- 七、一時の生命は真の生命の糧である。

29) 「マタイによる福音書」第5章第21～47節を参照のこと。

30) トルストイ（中村融訳）『わが信仰はいずれにありや』（中村融訳『トルストイ全集』15、河出書房新社、1974年、5～153頁所収）12～13頁。

桃山学院大学キリスト教論集 第51号

- 八、ゆえに、真の生命は時間を超越している——それはつねに現在のなかにある。
- 九、生命の欺きは、時のなかにある。過去と未来の生命は、人の前に、現在の真の生命を隠蔽する。
- 十、ゆえに人は、過去と未来の一時的生命の欺きを破却するために、つねに努力しなければならない。
- 十一、真の生命は、万人に共通なる現在の生命であって、愛によって表現されるものである。
- 十二、ゆえに、現在において万人に共通する生命であるところの愛に生きるものこそ、父、本源、および基礎的生命と一致するものである³¹⁾。

これらの章は2章ごとに原因・結果の関係になっているので、6章にまとめることもできる³²⁾。これらは全体を通して、すべての「本源」は「霊」であって「肉」ではない、ということを主張している。トルストイによると、万人の「生命」に共通する「生命の本源」としての「霊」に生きることによってのみ、「真の生命」を生き、永遠の現在に生きることができる。こうしたトルストイの宗教観は、「生命の宗教」と呼んでいいだろう。これがトルストイの福音書解釈に基づく「イエスの教えそのもの」であり、それが全12章を通して様々な観点から論じられているのである。

その一例として、『要約福音書』第1章を見てみよう。ここでは、「マタイによる福音書」第4章第1～11節にある、イエスの荒野での修行の様子が描かれている³³⁾。そこでイエスは、自分の肉の誘惑に打ち克ち、40日の修行を終

31) トルストイ（中村白葉訳）『要約福音書』（中村白葉、中村融共訳『トルストイ全集』14、河出書房新社、1973年、251～344頁所収）252～253頁。

32) トルストイ、前掲書、253頁を参照のこと。

33) トルストイ、前掲書、266～267頁を参照のこと。

ウイトゲンシュタインにおける宗教と生活

えている³⁴⁾。この場面でイエスは、次のように言っている。

自分〔イエス〕は、肉を軽んずることはできるけれども、それからはなれてしまうことはできない、なぜなら自分は、霊によって肉体のなかに生まれたからである。かくのごときは、わが霊なる父の御意である、自分はそれにそむくことはできない³⁵⁾。

自分の父は肉でなくて霊である。自分は彼によって生きている。自分はつねに彼をわがうちに知り、かれひとりを崇め、かれひとりのために働き、かれひとりから報いを期待しているにすぎない³⁶⁾。

このように、トルストイにとって神とは、霊である。その意味で霊と肉とは隔絶されているのだが、離れてしまうこともできない。それでは、霊と肉とを結びつけるものは何か。第1章に先立つ「はしがき」においてトルストイは、次のように言っている。

万物のもととはじめは、生命の悟りである。生命の悟りは神である。そしてその悟りは、イエスの教えによれば、すべてのもととはじめになるものである。

すべてのものは、悟りを経て生命に生まれた。悟りなくして生くるものは何ものもありえない。悟りは真の生命を与える。悟り、これは真理の光である。光は暗黒に照る。暗黒は光を消すことはできない。

真理の光はつねに世にあって、世に生まれたもろもろの人を照らす。

34) なお『新約聖書』の記述では、イエスを誘惑する者は悪魔であって、イエスの肉ではない。ここでは、聖書から「不合理」を排除するというトルストイ独自の聖書解釈に基づいた「修正」が施されている。

35) トルストイ、前掲書、266頁。

36) トルストイ、前掲書、266～267頁。

光は世にあり、世はただ悟りの光をおのがうちに持つことによってのみ生きて来たのである。しかるに、世はそれを受けなかった。光はおのが国に来たのに、おのれの民はこれを受けなかったのである。

ただその悟りを受けた者、——その者だけが、彼の本質を信ずることによって、彼と同じものとなる可能性を受けたのである。悟りの可能性を信じる者は、肉の子とならず、悟りの子となった。

生命の悟りは、イエス・キリストとなって、肉のなかにわが身を顕したのである。そしてわれらは彼の意味を解した、すなわち祈りの子は、肉における人であって、生命のはじめである父と同じものであるから、父のごとく同じく生命のはじめであることを³⁷⁾。

この箇所は、「ヨハネによる福音書」第1章第1～14節に基づいた記述である³⁸⁾。トルストイの宗教観において、父(=神)は、生命の本源としての霊に他ならない。したがって、トルストイの宗教観を特徴づけているのは、霊と肉との対比である。霊と肉とは根本的に異なるのだが、肉は「悟り」を通じて霊に達し、真の生命になる。このとき肉と霊とは、一体である。しかし、「悟り」という真理の光が溢れていても、それに気づかないうちは、霊と肉とは隔絶されたままである。霊と肉とを接続するのが、「悟り」なのである。

トルストイは、自らの福音書解釈を基にロシア正教会と対決するとともに、宗教的著作の執筆に没頭した。それは、死の床にあったツルゲーネフ(Ivan Sergeyevich Turgenev, 1818-1883)にして、「わが友よ、文学活動に戻れ。

37) トルストイ、前掲書、263～264頁。

38) この箇所も、かなり修正されている。引用箇所の冒頭部分は、『新約聖書』では次のようになっている。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は神であった。この言は、初めは神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一なかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」(「ヨハネによる福音書」第1章第1～5節)。

ウィトゲンシュタインにおける宗教と生活

わが友、ロシアの国の偉大な作家よ！」と訴えさせるほどであった³⁹⁾。しかし、その後もトルストイは、自らの信仰に基づいて飲酒・喫煙・肉食・狩猟などを止めたり、肉体労働に従事したりするなど、生活の改革を行った。さらに、妻子の反対によって実行できなかったものの、財産の処分、印税の受領拒否、地代収入の放棄などをも企てている。その結果、トルストイは家庭内で孤立を深め、家出を試みることにもなった。事の顛末はともかく、トルストイにおいては信仰と生活とが密接に結びついていたということに注意しておこう。

II 生活の宗教

(1) トルストイとの邂逅

ウィトゲンシュタインの宗教観を考える際、トルストイから受けた影響は決定的であると言ってよい。この点については、大きな異論はないと思われる。たとえば、ライト (Georg Henrik von Wright, 1916-2003) は「トルストイは、ウィトゲンシュタインの人生観に強い影響を与え、そして彼を福音書研究に導いた」⁴⁰⁾ と言っているし、マルコム (Norman Malcolm, 1911-1990) もウィトゲンシュタインがトルストイに「大きな印象を受けた」⁴¹⁾ と言っていたことを証言している。またトゥールミン (Stephen Edelston Toulmin, 1922-2009) とジャニク (Allan Janik, 1941-) は、「ウィトゲンシュタインに最も深く、そして最も直接的に道徳的影響を及ぼしたと思われるのは、トルストイであった」⁴²⁾ と言っている。

39) 藤沼貴, 前掲書, 433~434頁を参照のこと。

40) G. H. von Wright, "A Biographical Sketch," in: *Ludwig Wittgenstein, a memoir*, Norman Malcolm, 2nd ed., Oxford University Press, New York, 2001, p. 10.

41) Norman Malcolm, "A Memoir," in: *Ludwig Wittgenstein, a memoir*, Norman Malcolm, 2nd ed., Oxford University Press, New York, 2001, p. 58.

42) Allan Janik, Stephen Toulmin, *Wittgenstein's Vienna*, Simon and Schuster, ↗

しかし、具体的にどのような影響を与えたのかとなると、詳しい記述はない。モンク (Ray Monk, 1957-) も、ウイトゲンシュタインがトルストイの『要約福音書』と出会った経緯については触れているものの、その内実を詳述しているわけではない⁴³⁾。マクギネス (Brian McGuinness, 1927-) が、やや詳しく紹介している程度である⁴⁴⁾。したがって、ウイトゲンシュタインに対するトルストイの影響については、その存在は認められながらも、ほとんど放置されてきた、と言ってよい。

もっとも、ウイトゲンシュタインにおいてトルストイがどれほど重要な存在であるかは、ウイトゲンシュタインの哲学における宗教の地位をどのように評価するかによっても変わってくるだろう。もし、ウイトゲンシュタインの哲学において宗教が取るに足らないものだと考えるならば、トルストイからの影響はウイトゲンシュタインの私的な生活の範囲にとどまり、ウイトゲンシュタインの哲学においてはさして重要ではないということになる。しかし後述のように、ウイトゲンシュタインにおいて哲学と生活とは固く結びついている。それゆえ、ウイトゲンシュタインにおける宗教の問題は、生活上の問題であると同時に、哲学上の問題でもあった。したがって、トルストイからの影響はウイトゲンシュタインの哲学にも及んでいる、と見るべきだろう。

ラッセル (Bertrand Arthur William Russell, 1872-1970) がオットリーン夫人 (Ottoline Violet Anne Morrell, 1873-1938) に宛てた手紙によると、東部戦線のガリシア地方 (Galicia) に出陣していたウイトゲンシュタインは、1914年9月初旬、タルヌフ (Tarnow) という町の書店に偶然立ち寄り、トル

↘ New York, 1973, p. 177.

43) cf., Ray Monk, *Ludwig Wittgenstein: The Duty of Genius*, Penguin Books, New York, 1991, pp. 115-116.

44) cf., Brian McGuinness, *Young Ludwig: Wittgenstein's Life, 1889-1921*, Penguin Books, London, 1988, pp. 220-228.

ワイトゲンシュタインにおける宗教と生活

ストイの『要約福音書』を見つけたらしい⁴⁵⁾。そして、『要約福音書』に魅せられたワイトゲンシュタインは、それを繰り返し読んだ。戦場でも常に身につけ、片時も手放さなかったため、他の兵士から「福音書を持つ男 (the one with the gospels)」と呼ばれるほどだった⁴⁶⁾。ワイトゲンシュタインがトルストイから受けた影響は、主にはこの『要約福音書』によるものである。

ワイトゲンシュタインは一貫して宗教に関心を寄せ続けているが、その原点はこの『要約福音書』であったと考えてよい。ワイトゲンシュタインは、トルストイを読み始めて10日ほどたった⁴⁷⁾ 1914年9月12日の日記で、次のように言っている。

私は、霊 (der Geist) において自分に繰り返し「人間は、肉において無力だが、霊によって自由である」というトルストイの言葉を言い聞かせている。霊が私のうちにありますように！ (GT, S. 21)

この日の日記は、「神よ、私に力を与えたまえ！ アーメン。アーメン。アーメン」(GT, S. 21) という祈りの言葉で結ばれている。そしてこれ以降、日記には「神よ、私とともにあれ！」(GT, S. 22, 27-30), 「霊が私を導きますように」(GT, S. 22), 「霊が私に力を与えてくださいますように！」(GT, S. 25), 「霊よ、私とともにあれ」(GT, S. 27) といった、祈りの言葉が繰り返し現れるようになる。1914年10月20日の日記には「私の霊が、私の中で鬱病に対して話

45) cf., Bertrand Russell, *The Selected Letters of Bertrand Russell: The Public Years, 1914-1970*, Nicholas Griffin, ed., assisted by Alison Roberts Miculan, Routledge, New York, 2001, p. 199.

46) cf., Hermine Wittgenstein, trans. by Michael Clark, "My Brother Ludwig," in: *Recollections of Wittgenstein*, Rush Rhees, ed., Oxford University Press, New York, 1984, p. 3.

47) 日記にトルストイの名前が初めて出てくるのが、1914年9月2日である (vgl., GT, S. 20)。

している。神よ、私とともにあれ」(GT, S. 33) といった記述もある。

ドゥーラ (Nicolás Sánchez Durá) は、「戦地での日記に現れた『霊』という語は、たしかにトルストイと関係がある」⁴⁸⁾ と言っている。モンクも、ウイトゲンシュタインはトルストイによって「宗教的回心 (religious conversion)」⁴⁹⁾ を遂げた、と考えている。ウイトゲンシュタインは、『要約福音書』を通してトルストイの宗教思想に触れ、自らの倫理観・宗教観・人生観を大きく変えていったのだろう。キャロル (Thomas D. Carroll) は、ここにウイトゲンシュタインの「信仰心 (religiosity)」⁵⁰⁾ を見出している。それでは、ウイトゲンシュタインがトルストイから受けた影響とは、具体的にはいかなるものなのか。そして、それによって醸成されたウイトゲンシュタインの宗教観とは、どのようなものなのか。次に、考察していくことにしよう。

(2) 教義と教会への疑念

ここでは、トルストイからの影響を具体的に確認するため、ウイトゲンシュタイン自身の言葉を見ていこう。まず、1937年2月21日の日記には、次のような記述がある。

私は、繰り返し使徒パウロの手紙を読んでいるが、喜んで読んでいるわけではない。私がそこで感じる抵抗と反感とが、少なくとも部分的には言葉、つまりドイツ語、ゲルマン語のせいではないのかどうか、それゆえ翻訳のせいではないのかどうか、分からない。しかし私には、分からない。その厳格さ、大きさ、真剣さによって私に反感を抱かせているのは、

48) Nicolás Sánchez Durá, "Wittgenstein on War and Peace," in: *The Darkness of this Time: Ethics, Politics, and Religion in Wittgenstein*, Luigi Perissinotto, ed., Mimesis International, Fano, 2015, p. 172.

49) Monk, *ibid.*, p. 115.

50) Thomas D. Carroll, *Wittgenstein within the Philosophy of Religion*, Palgrave Macmillan, New York, 2014, p. 48.

ウイトゲンシュタインにおける宗教と生活

単に説教のみならず、(どのようにしてかはっきりしないが) それを説く人の人格でもあるかのように、私には思われる。 (DT, S. 195)

また、1937年10月4日の手稿には、次のような記述がある。

福音書では穏やかに清らかに湧き出している泉が、パウロの手紙では泡立っているようだ。少なくとも私には、そう思える。もしかすると、私自身が不純であるからこそ、パウロの手紙が濁って見えるだけなのかもしれない。このとき、こういう不純さが清らかなものを不純にしてはならない理由はあるのだろうか？ しかし私には、パウロの手紙には人間の情熱 (die Leidenschaft) が見えるような気がする。それは、高慢 (der Stolz) や怒り (der Zorn) のようなものであり、福音書の謙虚さとは矛盾するものである。なにしろ、パウロの手紙では固有の人格がそれも宗教的な行為として強調されているように思えるのだが、それは福音書には見られないことである。私は、——これが冒涇にならないことを願いながら——問いたい。すなわち、「キリストなら、パウロに何と云うのだろうか？」と。(VB, S. 492)

福音書の方が、——これも私の感じだが——すべてが質素で、謙虚で、単純である。福音書が小屋なら、パウロの手紙は教会である。福音書では人間はみな平等で、神自身が人だが、パウロの手紙では既に位階とか官職といった階級制度のようなものがある。——そう言っているのは、いわば私の嗅覚である。(VB, S. 492)

前節で見たように、トルストイの宗教的思索の出発点は、キリスト教の教義の中に「イエスの教えそのもの」ではない矛盾や不合理といった不純物を見出したことにあった。そして、そこから教義の否定、さらにはロシア正教会との対決へと突き進んでいった。上掲の引用からは、ウイトゲンシュタイ

ンもキリスト教の教義あるいは教会に疑念を抱いていたことが窺える。実際、ウイトゲンシュタインは、トルストイほど過激ではないものの、カトリック教会に対する批判的な見解を公言していた⁵¹⁾。たとえば、1929年のドゥルーリー (Maurice O'Connor Drury, 1907-1976) との会話の中で、ウイトゲンシュタインは次のように発言している。

カトリックの教えの象徴的表現 (the symbolisms of Catholicism) は、言葉を超えて素晴らしいものです。しかし、それを一つの哲学的体系にしようとするいかなる試みも、不快です⁵²⁾。

また、1937年9月11日の手稿では、次のように言っている。

たとえば、絵のような命題 (der Satz) を、人間にとって思考を縛る教義 (das Dogma) として固定されたとしよう。しかも、それが意見を規定するのではなく、意見の表現 (der Ausdruck) を完全に支配する教義であるとしよう。するとそれは、独特の効果を持つだろう。人間は絶対的な圧制の下で生活しているとはっきりと感じるだろうが、自分たちは自由ではないと言うこともできない。私は、これと似たようなことをカトリック教会がしているのではないか、と思っている。教義は主張の表現の形式を持っているので、教義が揺らぐことはないし、どのような実践的な意見をも教義に調和させることができる。……〔中略〕……その

51) モンクは、次のように言っている。「ウイトゲンシュタインは、カトリック教徒ではなかった。彼は、会話と著作の両方における多くの機会に、カトリック教徒たちが信じている事柄を自分に信じさせることができないと言っていた。さらに重要なのは、彼はカトリックの教義を実践しなかったことである」(Monk, *ibid.*, p. 580)。

52) M. O'C. Drury, "Conversations with Wittgenstein," in: *Recollections of Wittgenstein*, Rush Rhees, ed., Oxford University Press, New York, 1984, p. 102.

ウイトゲンシュタインにおける宗教と生活

ため教義は、反論も攻撃もされないのである。(VB, S. 489)

明らかにウイトゲンシュタインは、制度的な教会であるカトリック教会に対して懐疑的であった。マルコムも言うように、ウイトゲンシュタインの宗教的な感覚はキリスト教的であったが、教会という制度は信用していなかったのである⁵³⁾。その理由は、トルストイと同様、その教義にある。1930年に交わされたドゥルーリーとの会話でも、ウイトゲンシュタインは「自然的理性 (natural reason) によって神の存在が証明されうるというのが、ローマ教会の教義です。そしてこの教義が、私がローマ・カトリック教徒であることを不可能にしています」⁵⁴⁾と発言している。ここで問題は、キリスト教の教義に集約される。つまり、聖書の中の矛盾・不合理と思える部分をどのように処理するのかが問題になる。それは、イエスの奇蹟などを歴史的事実として認めるかどうか、という問題である。

トルストイは、矛盾や不合理を神学的・歴史学的に肯定するのではなく、キリスト教の教義から排除することで、「イエスの教えそのもの」を抽出しようとしていた。ウイトゲンシュタインも、神学的・歴史学的なアプローチを否定している。ウイトゲンシュタインは、1950年の手稿で次のように言っている。

そういう神学は、言いたいことはあるが表現の仕方が分からないので、いわば言葉を振り回している。言葉に意義 (der Sinn) を与えるのは、実践 (die Praxis) である。(VB, S. 571)

つまり、宗教に対して神学的・歴史学的に接近しようとしても、言語の限界という壁にぶつかってしまう、と言うのである。1931年5月6日の日記で

53) cf., Norman Malcolm, *Wittgenstein: A Religious Point of View?*, Peter Winch, ed., Routledge, London, 1993, p. 21.

54) Drury, *ibid.*, pp. 107-108.

ワイトゲンシュタインは、「ヨハネによる福音書」第2章を例に挙げ、奇蹟について次のように言っている。

もし、たとえばカナの結婚式のようなキリストの奇蹟をドストエフスキーがしたように理解しようとするれば、それは象徴 (das Symbol) として理解しなければならない。水をワインに変えるのはせいぜい驚くべきことでしかなく、そうしたことができる人間を我々は呆然と見つめはするだろうが、しかしそれだけである。……〔中略〕……奇蹟は、こうした行為に内容と意味 (die Bedeutung) とを与えるものでなければならない。そして奇蹟ということによって私が意味するのは、異常なことでも、現に起きたこと (das Dagewesen) でもなく、むしろそうしたことがなされる精神 (der Geist) であり、そして水からワインへの変化がその象徴、(いわば) それを示す身振り (die Geste) でしかないような何かなのである。もちろんそれは、こうした異常なことをなす者のみが示す身振りである。もし、奇蹟が我々に話しかけるものならば、それは身振りとして、表現として理解されねばならない。私は、次のようにも言える。すなわち、それは奇蹟的な精神でなす者がなした場合にのみ奇蹟なのである、と。このような奇蹟的な精神がなくては、それは単に異常で奇妙な事実 (die Tatsache) でしかない。(DT, S. 82-83)

つまり、トルストイが教義の矛盾や不合理を受け入れなかったように、ワイトゲンシュタインも奇蹟をそのまま受け取ろうとはしないのである。ここでワイトゲンシュタインが問題にしているのは、「精神」である。それは、聖書の中の歴史的な記述についても同様である。1937年12月8日～9日の手稿でワイトゲンシュタインは、次のように言っている。

奇妙に聞こえるかもしれないが、福音書の歴史的な報告は歴史的な意義においては間違っていると証明することができるが、それによって

ウイトゲンシュタインにおける宗教と生活

信仰は揺らがない。しかしそれは、信仰がたとえば「普遍的な理性の真理 (allgemeine Vernunftwahrheit)」と関係しているからではない！そうではなくて、歴史学的な証明（歴史学的な証明ゲーム）は、信仰と無関係だからである。信仰のある（つまり、愛のある）人間が、そういう知らせ（福音書）に、飛びつくのである。他でもないこのことこそが、この正しさを保証している。(VB, S. 495)

ここでウイトゲンシュタインは、信仰そのものを否定しているわけではない。また、聖書を拒否しているわけでもない。問題にしているのは、あくまでも聖書の記述、より正確に言うならば聖書の記述の受け取り方である。それでは、聖書から何を受け取ろうというのか。トルストイにおいてそれは、「イエスの教えそのもの」であった。ウイトゲンシュタインにとっての「イエスの教えそのもの」とは何だろうか。

(3) 生活の在り方の転換

前節で見たように、トルストイにおいて、神は生命の本源たる霊であり、肉は悟りを通じて霊に達し、そうして真の生命を生きることができた。そうしてトルストイは人生の意義を福音書の中に見出したのであるが、これは「生命の宗教」と呼びうる宗教観である。ウイトゲンシュタインが実際に読んだ『要約福音書』の訳本において「霊」には Geist という訳語が充てられているが⁵⁵⁾、ウイトゲンシュタインにおいても信仰は精神（霊）と生活（生命）との問題であった。ウイトゲンシュタインは、1937年10月22日の手稿で、精神と生活について次のように言っている。

本質的なもの、あなたの生活 (das Leben) にとって本質的なものは、精

55) vgl., Graf Leo N. Tolstoy, *Kurze Darlegung des Evangelium*, übers. von Paul Lauterbach, Philipp Reclam, Leipzig, 1892. (<https://archive.org/details/kurzedarlegungde00tols>)

神 (der Geist) が聖書の言葉に込めている。あなたはただ、聖書の叙述によってはっきり示されているものを、はっきり見ればいいのだ。(VB, S. 494)

すなわち、聖書から受け取るべきものは、言葉ではなく精神なのである。聖書に見られる矛盾や不合理は、いわば「文字が分不相応に信じられないための配慮」(vgl., VB, S. 493)なのである。ワイトゲンシュタインにとっての「イエスの教えそのもの」とは、聖書の精神である。これは、先に見た戦場のワイトゲンシュタインの祈りの言葉にも通じる。そしてその祈りは、トルストイによって導かれたものだった。

トルストイにおいて宗教の意義は生命の意義と同義であったが、ワイトゲンシュタインにおいても宗教は生活の在り方として関わってくる。ワイトゲンシュタインは、ドゥルーリーとの会話で次のように言っている。

キリスト教はたくさんの祈りの言葉を言うという問題ではない、ということをお出しなさい。我々は宗教について多くを語るべきではなく、我々の生活の仕方 (manner of life) が変わらなければいけないのです⁵⁶⁾。

また、1937年2月27日の日記では「問題は、お前がこの生活をどう送るか? である」(DT, S. 208)と言っているし、1946年10月11日の手稿でも「キリスト教はとりわけ、すべてのよい教えは役に立たないと言っている。生活は変わらねばならない。(もしくは、生活の方向を変えねばならない。)」(VB, S. 525)と言っている。つまり、生活の在り方を変えることが重要なのだ、と。しかし、とりわけ宗教的な文脈において、「生活の在り方を変える」とは、どういうことなのか。ワイトゲンシュタインは、1947年12月21日の手稿で次のように言っている。

56) Drury, *ibid.*, p. 114.

ウイトゲンシュタインにおける宗教と生活

宗教の信仰とはある規準系（das Bezugssystem）を決心するようなことにすぎないのではないか、と思われる。つまり、信仰であるのにも関わらず、一つの生活の仕方（eine Art des Lebens）、もしくは生活を判断する仕方（eine Art das Leben zu beurteilen）なのである。情熱的にこうした捉え方をすることなのである。（VB, S. 541）

つまり、信仰とは生活の変革である、と言うのである。1950年の手稿では、次のように言っている。

生活が、神への信仰を教育することがある。そして、経験がすることもある。……〔中略〕……経験、思考、——生活が、我々に神の概念を押しつける。（VB, S. 571）

すなわち、生活の変革によって信仰に至るのだ、と言うのである。こうして見ると、ウイトゲンシュタインにとって宗教とは、どこまでも生活の問題であることが分かる。つまり、教義のような知識や理論の問題としてはまったく捉えられていないのである。こうしたウイトゲンシュタインの宗教に対する真摯な姿勢に基礎づけられた宗教観は、「生活の宗教」と呼ぶことができるだろう。しかし、ウイトゲンシュタインにおいて宗教と生活とが密接に関係しているとして、両者はどのような関係にあるのだろうか。最後に、この点を考察していこう。

おわりに

ウイトゲンシュタインにおいて宗教は、知識や理論としてではなく、ただただ生活の在り方として捉えられていた。それゆえウイトゲンシュタインは、制度化された教会や教義には否定的であった。これまで、ウイトゲンシュタ

インは宗教一般に否定的であると見られることが多かったが、それは誤ったイメージである。ここまでの議論から分かったことは、ウイトゲンシュタインがトルストイの『要約福音書』に啓発され、それによって聖書の精神へと目を向け、生活の変革を志向していた、ということである。しかし、問題は残っている。すなわち、宗教によって生活の在り方が変わるのか、それとも生活の在り方を変えることによって信仰に達するのか、という問題である。それは、おそらく両方であろう。

ここで、トルストイにおいて宗教が実生活の問題であったことを思い出そう。トルストイの宗教観において信仰は、実践と密接に結びついていた。ウイトゲンシュタインにおいても同様である。これには二つの意味がある。一つは、上で述べた、宗教は知識ではなく精神によって導かれる、ということである。そしてもう一つは、信仰には常に生活上の実践が伴われる、ということである。実際にトルストイは、信仰に基づいて自分の財産の処分を検討していた。ウイトゲンシュタインも、第一次世界大戦からの復員後、周囲の反対を押し切って、財産を放棄している⁵⁷⁾。これには、トルストイの影響も多分にあったと考えられる⁵⁸⁾。これは一例に過ぎないが、ウイトゲンシュタインにおいて宗教と生活とが一体であったことを、典型的に示しているだろう。つまり、ウイトゲンシュタインにとって宗教とは、すぐれて実存的な課題だったのである。それは、ウイトゲンシュタインの哲学にも影響を及ぼしている。したがって、『論考』の命題6.4以降に見られる倫理的・宗教的な命題を解釈する際にも、こうした理解が前提として必要になるだろう。

参考文献

Thomas D. Carroll, *Wittgenstein within the Philosophy of Religion*, Palgrave Macmillan, New York, 2014.

57) cf., Hermine Wittgenstein, *ibid.*, p. 3.

58) 星川啓慈『宗教者ウイトゲンシュタイン』法藏館, 1990年, 37~38頁を参照のこと。

ウィトゲンシュタインにおける宗教と生活

- 藤沼貴『トルストイ』第三文明社，2009年。
- 藤沼貴『トルストイ・クロニクル——生涯と活動——』東洋書店，2010年。
- Henry Gifford, *Tolstoy*, Oxford University Press, English, 1982. (H・ギフォード〔小沼文彦，広瀬良一共訳〕『トルストイ』教文館，1993年)。
- 原卓也「トルストイの宗教思想」(日本ロシア文学会『ロシア語ロシア文学研究』第19号，1987年10月，1～10頁所収)。
- 星川啓慈『宗教者ウィトゲンシュタイン』法藏館，1990年。
- 飯田隆編『ウィトゲンシュタイン読本』法政大学出版局，1995年。
- Allan Janik, Stephen Toulmin, *Wittgenstein's Vienna*, Simon and Schuster, New York, 1973. (S・トゥールミン，A・ジャニク〔藤村龍雄訳〕『ウィトゲンシュタインのウィーン』平凡社ライブラリー，2001年)。
- 鬼界彰夫『ウィトゲンシュタインはこう考えた 哲学的思考の全軌跡1912-1951』講談社現代新書，2003年。
- 黒崎宏『ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』勁草書房，1980年。
- Norman Malcolm, *Wittgenstein: A Religious Point of View?*, Peter Winch, ed., Routledge, London, 1993. (ノーマン・マルカム〔ピーター・ウィンチ編，黒崎宏訳〕『ウィトゲンシュタインと宗教』法政大学出版局，1998年)。
- Norman Malcolm, *Ludwig Wittgenstein, a memoir*, 2nd ed., Oxford University Press, New York, 2001. (ノーマン・マルコム〔板坂元訳〕『ウィトゲンシュタイン 天才哲学者の思い出』平凡社ライブラリー，1998年)。
- Brian McGuinness, *Young Ludwig: Wittgenstein's Life, 1889-1921*, Penguin Books, London, 1988. (ブライアン・マクギネス〔藤本隆志，今井道夫，宇都宮輝夫，高橋要共訳〕『ウィトゲンシュタイン評伝 若き日のルートヴィヒ 1889-1921』法政大学出版局，1994年)。
- Luigi Perissinotto, ed., *The Darkness of this Time: Ethics, Politics, and Religion in Wittgenstein*, Mimesis International, Fano, 2015.
- Ray Monk, *Ludwig Wittgenstein: The Duty of Genius*, Penguin Books, New York, 1991. (レイ・モンク〔岡田雅勝訳〕『ウィトゲンシュタイン 天才の責務 1』みすず書房，1994年，レイ・モンク〔岡田雅勝訳〕『ウィトゲンシュタイン 天才の責務 2』みすず書房，1994年)。
- Rush Rhees, ed., *Recollections of Wittgenstein*, Oxford University Press, New York, 1984.

桃山学院大学キリスト教論集 第51号

Bertrand Russell, *The Selected Letters of Bertrand Russell: The Public Years, 1914-1970*, Nicholas Griffin, ed., assisted by Alison Roberts Miculan, Routledge, New York, 2001.

Graf Leo N. Tolstoy, *Kurze Darlegung des Evangelium*, übers. von Paul Lauterbach, Philipp Reclam, Leipzig, 1892. (<https://archive.org/details/kurzedarlegungde00tols>)

トルストイ (中村白葉, 中村融共訳) 『トルストイ全集』 14, 河出書房新社, 1973年。

トルストイ (中村融訳) 『トルストイ全集』 15, 河出書房新社, 1974年。

A Study of the Life in the Religious Thought of L. Wittgenstein

Kiyoshi ITO

In Wittgenstein's diaries, manuscripts, and so on, he makes numerous references to religion. From this, we can see that Wittgenstein had a strong interest in religion, and that this interest continued consistently right from his 'early phase' to his 'late phase.' However, these are no more than fragmentary writings, and they do not go so far as to clearly indicate exactly what Wittgenstein's religious understanding was.

In this paper, in order to pursue the essence of Wittgenstein's interest in religion, and to clarify the characteristics of his religious understanding, I focus on Tolstoy, who exerted a powerful influence on Wittgenstein. By considering Wittgenstein's religious understanding centered on the influence exerted by Tolstoy on him, we see that, for Wittgenstein, religion was truly an 'issue of life.' Accordingly, Wittgenstein's religion can be called a 'religion of life.'